様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００１７８

研究課題名（和文）中世律宗絵画に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Ritsu-School Paintings in Medieval Japan

研究代表者
瀬谷　愛（Seya, Ai）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・室長

研究者番号：５０５５５１３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本中世において全国的に展開し、宗派を超えて大きな影響を与えた中世律宗諸流派が、国宝「一遍聖絵」、重要文化財「文王呂尚図・商山四皓図屏風」、「聖徳太子絵伝」、「聖徳太子二歳像」などの絵画彫刻作品の制作に関与した可能性について、表現技法や図様の比較、背景分析から明らかにし、13世紀から14世紀にかけての仏教絵画研究に「中世律宗絵画」という新たな視座を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
絵画を中心とした美術作品の制作現場に関して、注文主と作家の仲介役になった可能性がある律僧らの動向をあわせて調査分析することによって、地域、宗派、時代を超えた、より多角的な復元的考察が可能になった。また、諸宗派と連携した中世律宗に関する絵画に関する本研究成果は美術史のみならず、仏教史、日本史、国文学など隣接分野に活用され発展する可能性を有している。さらに、全国には中世律宗の関連遺跡、遺物が残っており、その再評価は各地方の地理や文化に根差した特色ある中世の姿をひきたたせ、現代における新しい価値の創造へとつながることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The possibility that the various schools of the medieval Ritsu school, which developed throughout Japan in the medieval period and exerted a great influence beyond sectarianism, were involved in the production of paintings and sculptures such as the national treasure Ippen Hijiri-e, the important cultural property Bunno Roshozu and Shozan Shikozu, the biography of Prince Shotoku, and the two-year-old statue of Prince Shotoku, is revealed through comparison of expression techniques and designs and background analysis. The study of Buddhist paintings of the 13th and 14th centuries has been given a new perspective in the field of medieval Ritsu painting.

研究分野：日本美術史

キーワード：中世律宗　叡尊　忍性　一遍聖絵　聖徳太子信仰　聖徳太子絵伝　聖徳太子二歳像　舎利信仰

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

⑴　日本中世の戒律復興期における律僧の集団を「中世律宗」と呼ぶが、実際には古代南都六宗のような「宗」を形成したわけではなく、律僧たちはそれぞれ既存の宗派を背景に持ちながら戒律を護持し、独自の活動を展開した。中世律宗の研究はこの四半世紀に大きく進展し、律僧たちが流派、宗派、地域を超えた僧尼と交流して、寺社の勧進活動、社会救済活動、人材派遣、仏具斡旋など幅広い活動を行っていたことがわかってきた

⑵　その活動にともなって制作された美術は、律宗祖師たちの肖像や高僧伝絵などがすでに知られてきたが、本研究課題に先んじて研究代表者が取り組んでいた社寺縁起絵・高僧伝絵の研究成果によって、鎌倉時代・13 世紀から南北朝時代・14 世紀にかけて制作された美術の中に、律僧が勧進活動や聖徳太子信仰などに関連して、制作に関与した作例が相当数ある可能性が見いだせた。

２．研究の目的
⑴　日本中世において全国的に展開し宗派を超えて大きな影響を与えた律宗諸流派が、絵画制作にどのように関与したかを明らかにし、13 世紀から 14 世紀にかけての仏教絵画研究に「中世律宗絵画」という新たな視座を提示する。

⑵　絵画を中心とした美術作品の制作現場に関して、注文主と作家の仲介役になった可能性がある律僧らの動向をあわせて調査分析することによって、従来の制作現場の復元的考察から脱却し、地域、宗派、時代を超えた図様、テキスト、制作意図を解明し、作品の歴史的位置づけを行う。

３．研究の方法
⑴　本研究はまず、研究代表者が所属する東京国立博物館が所蔵する作品調査よりはじめ、国内外に所蔵される関連作例の所在確認と作品調査へと広げた。

⑵　作品調査は絵画的な表現技法の分析、画風の分類、作品データの採取、高精細写真撮影などを行った。

⑶　文献資料、歴史背景の調査、分析の成果はデータ化して蓄積し、整理を行った。また、律宗関連拠点の現地踏査を行い、より臨場感のある絵画の構造分析を行った。

４．研究成果
⑴　2018 年度は、まず代表者が平成 2015～2017 年度に助成を受けた若手研究 B「中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容」から継続する研究対象である「聖徳太子二歳像」（神奈川県立金沢文庫、京都・白毫寺、奈良・円成寺、奈良・伝香寺、奈良・元興寺、大阪・叡福寺、大阪・道明寺）について、ハーバード大学美術館と共同して作品調査を行なった。中世における二歳像の造立には中世律宗とその舎利信仰が関与した可能性がすでに指摘されており、代表者はその重要拠点のひとつである法隆寺東院舎利殿の美術のうち、「文王呂尚図・商山四皓図屏風」（東京国立博物館）とその模本（奈良・法隆寺）、「蓮池図屏風」（奈良・法隆寺）に関して、本研究の視点から分析を行なった。その成果は、国際シンポジウム「日本仏教の展開とその造形」（ハーバード大学ライシャワーセンター、龍谷大学アジア仏教文化研究センター共同主催、於ハーバード大学、2019 年 1 月 18 日）にて口頭発表を行なった。また、中世律宗が重要拠点の一つとした丹後国に所在する天橋立、鎌倉時代の遊行聖・一遍が訪れた久美浜を現地踏査し、天橋立を画題とした雪舟筆「天橋立図」に関する論考にその成果を反映させた（「雪舟筆《天橋立図》の事情」『美術フォーラム 21』）。中世律宗のもう一つの重要拠点として挙げられる、広島・尾道浄土寺にて「仏涅槃図」、「弘法大師絵伝」等の調査撮影を行ない、多くの知見を得た。

⑵　2019 年度は、それまでの研究成果を発表、刊行した。「社寺参詣曼荼羅としての一遍聖絵」（五味文彦編『国宝一遍聖絵の全貌』）は、「中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容」（課題番号 15K16654）の成果で、現研究課題の発想の原点である。2018 年度に行なったハーバード大学美術館との共同調査の研究成果は、同館開催の特別展「Prince Shotoku: The Secrets Within」（2019 年 5 月 25 日～8 月 11 日）に伴う Study Day にて口頭発表した（Passage to the Pure Land: The Sedgwick Shotoku and the Cult of the Dancing Priest Ippen (1239-1289)、2019 年 5 月 28 日）。また、2018 年に国際シンポジウム「日本仏教の展開とその造形」（ハーバード大学ライシャワーセンター、龍谷大学アジア仏教文化研究センター 共同主催、於ハーバード大学）にて口頭発表した、中世律宗の重要拠点・法隆寺東院舎利殿の美術に関する論考を刊行した（「法隆寺東院舎利殿の美術と中世律宗」『日本仏教の展開とその造形』）。またその概要を「法

隆寺舎利殿障子絵の制作背景」（『法隆寺献納宝物特別調査概報 XL 文王呂尚・商山四皓図屏風2』）にまとめた。作品調査等では、中世律宗の重要拠点である広島・尾道浄土寺の近くに所在する浄土宗寺院・持光寺にて、「釈迦八相図」の調査撮影を行なった。その作風と中世尾道の状況から、この大画面説話画の優品を 14 世紀の浄土寺再興にあたって制作されたものと位置づける試論（「大画面祖師絵伝と西大寺流律宗」）を、2018 年度に行なった尾道浄土寺の宝物に関する研究成果とともに、特別展「聖徳太子信仰―鎌倉仏教の基層と尾道浄土寺の名宝―」展覧会図録（神奈川県立金沢文庫）に発表した。

(3) 2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、当初計画していた移動を伴う作品調査等が不可能となったため、コロナ下で実施可能な調査研究を行なった。まず、中世律宗の聖地に関して、大阪・家原寺、奈良・竹林寺、喜光寺とその周辺を現地踏査した。奈良時代に東大寺大仏建立に尽力したことで知られる行基は、民衆布教や社会事業を広く行なったことが知られる高僧である。その誕生地に建つ家原寺、没地に建つ喜光寺、墓地である竹林寺には、行基の後継・復興者としての叡尊・忍性らとのつながりがみられた。また、在宅にて可能な調査研究として、過去の調査研究成果である作品画像の整理と分析、これまでの研究史と本研究課題における研究代表者の成果の整理を行った。画像データの一部は特別展「国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史」（和歌山県立博物館、2020 年 10 月 17 日～11 月 23 日）の図録にて活用された。また、一遍聖絵、聖徳太子二歳像、法隆寺東院舎利殿、文王呂尚図・商山四皓図屏風、広島・尾道浄土寺、広島・持光寺所蔵釈迦八相図など、本研究課題で取り組んできた研究について論文執筆の準備を行なった。

(4) 2021 年度は、引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により移動を伴う作品調査等が困難であったため、本研究課題で取り組んできた研究について考察を深め、暫定的総括としての論文を執筆、刊行した（「中世律宗絵画試論」『東京国立博物館紀要』第 57 号）。論文では、日本中世において全国的に展開した律宗諸宗派が、どのような絵画作品の制作に関与したかを、13 世紀末から 14 世紀にかけての代表的な仏教美術を通してまとめた。具体的には、西大寺流極楽寺忍性が永仁 6 年（1298）、唐招提寺に施入した「東征伝絵巻」の背景に唐招提寺中興二世証玄の七回忌追善があったこと、承安元年（1299）、「一遍聖絵」の成立背景に律宗の関与がみられること、「一遍聖絵」の発願者聖戒が永仁 3 年（1295）、四天王寺において当時の別当・極楽寺忍性とともに聖徳太子像を造像した可能性があることなどから、中世律宗が流派、宗派の垣根を越えて広く活動し、現存する作例に関わっていた様子を見出した。また、とくに西大寺流律宗が進めた聖徳太子信仰の布教をめぐっては、これを契機に聖徳太子二歳像や掛幅形式の聖徳太子絵伝といった新しい造形が誕生した可能性を見出すことができ、現存する多くの作例の発生源として指摘した。さらに、律僧がその強力なネットワークを駆使し、尾道浄土寺や法隆寺東院舎利殿の復興を手掛けた過程でも、多くの名作が誕生し、今日に残されている。2021 年は聖徳太子 1400 年遠忌にあたり、多くの記念展覧会が開催された。本研究課題による研究成果もこれらの展覧会、図録にて引用された。

(5) 2022 年度は、新型コロナウイルスの感染対策が徐々に緩和されたため、移動を伴う調査を再開しつつ、研究課題で取り組んできた研究成果の一部を論文にまとめ、アメリカ、ハーバード美術館、名古屋大学など国内外の大学、博物館と共同して書籍を刊行した（『ハーバード美術館南無仏太子像の研究』）。論文では、日本中世に多数絵画化された聖徳太子の伝記である「聖徳太子絵伝」を取り上げ、とくに中世前期における聖徳太子の二歳像（南無仏太子像）の表現を比較し、その成立背景に西大寺流律宗が関与した可能性を論じた。とくに、本論はハーバード美術館が所蔵する彫刻の南無仏太子像を文学、仏教学、美術史学から考察する共同研究を契機としたことから、その像内納入品や彫像の成立と聖徳太子絵伝との関係に着目した。その像内からは叡尊ら中世律宗との深い関係を示す資料がみつかっており、四天王寺を中心とした中世律宗の活動の興隆、数多く伝来する彫像と絵伝の南無仏太子像の作例から、ハーバード美術館の彫像が成立した正応 5 年（1292）にほど近い 13 世紀後期からこれらの制作が展開された蓋然性が高いと考えられる。国内で行った調査では、全国に活動を展開した中世律宗の足跡やこれらと軌を一にした可能性のある一遍の活動を追うため、河野通信墓（聖塚、北上市）、浦添ようどれ・琉球極楽寺跡（浦添市）を踏査し、関連資料の収集を行った。

(6) 2023 年度は、中世律宗の活動と美術工芸、資料等文化財の制作に関する今後の研究の展開を見通した調査や、これまで研究課題で取り組んできた成果の一部を論文にまとめる作業を行った。国内で行った調査では、全国に活動を展開した中世律宗の足跡を追うため、山口・二尊院、茨城・極楽寺跡、佐賀・東妙寺、京都・橋寺放生院、福岡・大乗寺跡、富山・国分寺跡等を踏査し、関連資料の収集を行った。研究成果となる論文では、2017 年に本研究課題の基礎となる研究課題（15K16654、中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容、2015～2018 年）の成果として行った特集展示「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」（東京国立博物館、2017 年 4 月 25 日～6 月 4 日）に新たな知見を加筆した論考をまとめ、近世真言律に関する隣接分野の研究者による学術成果とともに『寺院文献資料学の新展開 第 8 巻 近世仏教資料の諸相 I』（校正中、2024 年度刊行）に掲載予定である。また、2022 年に本研究課題の成果として発表した「中世律宗絵画史論」

で比較考察した「法華経曼荼羅図」（富山・本法寺）について、追加調査の内容を含めた論文をまとめ、美術史学、国文学等隣接分野の研究者による学術成果とともに『描かれた法華経 本法寺蔵法華経曼荼羅図の時空（仮）』（2024 年度刊行）に掲載予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 瀬谷愛	４．巻 第57号
２．論文標題 中世律宗絵画試論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京国立博物館紀要	６．最初と最後の頁 5-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀬谷愛	４．巻 1
２．論文標題 大画面祖師絵伝と西大寺流律宗	５．発行年 2019年
３．雑誌名 「聖徳太子信仰―鎌倉仏教の基層と尾道浄土寺の名宝―」展覧会図録、神奈川県立金沢文庫	６．最初と最後の頁 99-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀬谷愛	４．巻 第38号
２．論文標題 雪舟筆 《天橋立図》 の事情	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『美術フォーラム21』	６．最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 瀬谷愛
２．発表標題 Passage to the Pure Land: The Sedgwick Shotoku and the Cult of the Dancing Priest Ippen (1239-1289)
３．学会等名 ハーバード美術館: Prince Shotoku: The Secrets Within, Study Day（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀬谷愛
２．発表標題 法隆寺東院舎利殿の美術と中世律宗
３．学会等名 国際シンポジウム「日本仏教の展開とその造形」（ハーバード大学ライシャワーセンター＆龍谷大学アジア仏教文化研究センター共同主催）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 阿部泰郎、阿部美香、近本謙介、レイチェル・サンダーズ、瀬谷愛、瀬谷貴之編	４．発行年 2023年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 370
３．書名 ハーバード美術館南無仏太子像の研究	

１．著者名 五味文彦、冨島義幸、瀬谷愛他	４．発行年 2019年
２．出版社 高志書院	５．総ページ数 245
３．書名 国宝一遍聖絵の全貌	

１．著者名 阿部龍一、道元徹心、瀬谷愛他	４．発行年 2020年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 387
３．書名 日本仏教の展開とその造形	

１．著者名 瀬谷愛、東野治之、三田覚之他	４．発行年 2020年
２．出版社 東京国立博物館	５．総ページ数 95
３．書名 法隆寺献納宝物特別調査概報XL 文王呂尚・商山四皓図屏風2	

１．著者名 瀬谷愛、山本勉他	４．発行年 2019年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 176
３．書名 『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代造像銘記篇　十五』	

１．著者名 瀬谷愛	４．発行年 2019年
２．出版社 東京国立博物館	５．総ページ数 95
３．書名 『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXIX 文王呂尚・商山四皓図屏風1』	

１．著者名 中山一麿（監修）、山﨑淳（編）	４．発行年 2024年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 450
３．書名 寺院文献資料学の新展開　第8巻　近世仏教資料の諸相Ⅰ	

１．著者名 原口志津子他	４．発行年 2024年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 300
３．書名 描かれた法華経　本法寺蔵法華経曼荼羅図の時空（仮）アジア遊学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ハーバード美術館	ハーバード大学ライシャワーセンター		